

〔研究ノート〕

参与観察にかんするエッセイ

1

パーティシパント・オブザーベーション、わが国でいう参与観察は、メカニカルで冷めたい用語のならば「社会調査」の中で、何か人間味のある、ロマンチックですらあるものを感じさせる。かつて私がどりよせたホワイトの『ストリート・コーナー・ソサエティ』⁽¹⁾は、その表紙一ぱいに繊細なタッチでストリート・コーナーの情景が描かれたブックカバーに包まれていた。今日では全く珍しいことでないが、当時としては、学術書でありながらこのようにミステリーともまがう装丁に驚ろかされたものである。また、題名そのものも楽しい。

それは一般の人びとから隔てられ、神秘的ヴェールに包まれたかのようなスラム街に、一人の若い社会学者が長期間身を挺して調査を行なった参与観察の記録である。調査は探検と似て未知なるものへの探求であり、そこにロマンがある。調査者は社会探求

の旅人である。そこに新しい地平がひろがり、新しい諸事実の発見がある。

ふつうこの旅人は対象とする社会に対しては、観察者としてアウトサイダーである。これに対して参与観察は、調査者自身がその社会の参与者あるいは一メンバーとして、その社会そのものの中に位置を得、インサイダーとして観察を行なうものである。ここでは調査者は、調査者としてよりも、むしろその社会の参与者として人びとの前に現われ、調査対象者は、調査者にとって、あくまで調査対象者でありながら、付き合いの相手、人間関係の相手として対せられ、調査関係は日常的な人間関係に解消される。

一般に調査は、相手対象者が、これは調査であり、調査されていることをよく知っており、相手を調査者とし自分を被調査者とする関係において行なわれる。参与観察は、調査という非日常的状态を日常的な人間関係状況に置きかえ、メカニカルな調査関係を暖かい人間的要素によって蔽いつくそうとするものといえる。

井 垣 章 二一

調査対象者の側からすれば、相手が調査者であり、自分は調査されているという意識は尠らぐ。いわば調査でないようなかたちで、あるいは調査らしくないやり方で、調査が行なわれる。これによって、ありのままの人びとの状況が捉えられるばかりでなく、情報収集の範囲はひろげられ、豊富で正確なデータの獲得が可能となるとされる。

しかしここにどういふ問題が含まれているであろうか。この小論は、参与観察についてのすべてではない。以上の視点から参与観察というものをとりあげ、これを基に、ひろく調査における調査者と被調査者の関係、調査関係というものについて考えてみようとするものである。

注 本稿における引用・参照文献については、前もって文献リストに一連番号を付し、そのナンバーによって示すことにする。

2

ヤングによれば、パーティンバント・オブザーバーというタームは、一九二五年、リンデマンが『社会発見』(Social Discovery)にデビューさせて以来通用するようになったという。そして『ヨーロッパの労働者』(一八五五年)のル・プレーも、『ロンドンの民衆の生活と労働』(一八八九—一九〇二年)のブースもこの手法を用いたとしている。しかし彼らは一部これを用いたとしても、その調査を参与観察による調査とはいふことはできないであろう。この方法における初期の調査の有名なものは、一九二三年、アン

ダーソンの『浮浪者』(The Hobos)であった。彼は浮浪者の社会を明らかにするために、自から浮浪者になり、彼らと生活と行動を共にしながら観察を行なったのである。なおこのアンダーソンは先のリンデマンとの共著『都市社会学』(Urban Sociology, 1928)もあることを知ると、この二人の間の親交も深かったであろうと思われる。

続いて二〇年代にはリンド夫妻のミッドウルトOWN (Middle Town, 1929)が現れる。彼らは典型的なアメリカ人の生活パターンを明らかにするために、中西部の小都市マウンシーを選定し、夫婦でそこに居住し、隣人と付き合ひ、行事に参加し、一市民として生活を続けることによつて観察した。そして三〇年代後半には参与観察のお手本ともいふべきボストンのイタリア人スラム、コーナービルの研究がホワイトによつて開始される。彼は当時、一般人の近より難い社会の中の社会といふべきスラムに下宿し、その住民となり、一人のギャング・リーダーの協力を得て、その客人としてグループの一員となり、四年間にわたる観察を行なつた。

わが国に広く紹介されている参与観察はこの三つであるが、この手法は文化人類学者たちによつてもっと早くから用いられていた。一九一五年、マリノフスキーはトロブリアンダ諸島のある村にテントを張り、通訳者を用いず、土地の言葉を実地に学びつつ、人びとと生活を共にしながら観察した。事実に基づく文化人類学の構築は、実地調査によらざるを得ないが、言葉による取通

が困難な異なる社会とあつては、形式的な質問調査は全く不能であり、その社会に長期滞在し、人びとと生活を共にする中でさまざまな出来事を見聞きすることによって明らかにするしかない。すなわち、この場合、参与観察こそ最適の調査法となるのである。

参与観察は、調査者が調査のために対象とする社会の一員として参与し、人びとと生活を共にしながら、アウトサイダーとして外からではなく、インサイダーとして内側からその社会の諸事実を明らかにしようとするものである。もともとわれわれは自己の属する社会の一員として生活し、その体験者であることによつて、その社会について確かな知識をもっている。調査のために対象社会の一員になるということは、その社会がわれわれの属する社会でないこと、われわれがアウトサイダーである別の社会であるということができる。かくして参与観察は「ランケンバードがいうように」「もう一つ別の社会への再社会化 (Resocialization)」を意味する。では、参与観察とは具体的にどういうことか、フロレンス・クラックホーンのニューメキシコにおけるある村の調査の場合についてみてみよう。彼女のいうところをまとめてみると次の通りである。

参与者となることは、その社会自身の役割体系の何処かに自己を位置づけることを意味する。すなわち調査者は調査者としての役割でなく、その社会に通用している役割に自己を位置づけなければならぬのである。というのは、調査者は自分を参与者と意識するだけでなく、むしろ、相手が参与者と感じとってくれるこ

とが何よりも必要だからである。さて、その村のある商人の友人であり、夫は隣の地域で働いているのだという名目でそのコミュニティにのりこんだ彼女は、男たちが牧業などに出かけており、とどまつて家の面倒をみることになつてゐるその地の女達と全く相似た立場におかれてゐるのに気付いた。すなわち、その地の夫、主婦の役割という点では何ら異なるところがなかったわけである。このようにして彼女は女達と同じ役割を演じることによつて、家々に近づき非常に自然なやり方でつきつきと女たちと話しをすることができたのであつた。そして土着の食物の作り方、床のつくろい方のようなことから、ダンスでの身の振舞い方、男への接し方等々調査すべきことがらを自然な形で話させることができたのである。それは彼女がそこで生活しており、生活するために必要なものとして教えられなくてはならないものであるから、質問は決して相手に不審の念をいだかせなかつたのである。この点について、彼女は次のように主張する。相違点を見出そうとしてゐるのだと相手に思われるよりも、相手と同じようにならうとしてゐると思われていることの方が、はるかに情報を得やすい。参与的方法を用いない形式的な質問による面接は、特に調査のための特殊な情況をつくつてゐるわけであり、調査者と回答者との隔りを余りにも赤裸々にすることにより、自然な相互作用を妨げる。だからその社会の一員を装い自然な過程の中で、すなわち形式的な面接を会話に近づけることによつて、より妥当なデータを得ることができるといふのである。

これに関連して、『ストリート・コーナー・ソサエティ』におけるホワイトの場合もあげておくのがよいであろう。ギヤング・リーダーの客人としてそのグループの中に地位を得、イタリア人レストランの下宿人となつて、その住民なつた彼は、単なる参与者ではなく、調査者であることを次第に人びとに知られていく。ホワイトはいふ。

「私は、間もなく、人々が私についての彼等自らの説明——私はコーナーヴィルについて本を書いている——を發展させているのを知つた。それは全く余りにもほんやりし過ぎる説明ではあろう。でも、それでいいのだ。私がその地域で受け容れられることは、私が行なうことのできる如何なる説明よりも、私がこれまで發展させてきたパーソナル・リレーションシップに依存していることを私は知つた。コーナーヴィルについて書物を書くことがよいかどうかは、私個人についての人々の世論に全く依存している。私がよければ私のやろうとするのもいいのだ。もし私がよくなければ、どんなに説明したところで、その書物が善意だと彼等に納得させることはできなかったであらう。」しかしその善意は、よきパーソナル・リレーションシップは、どのようにして得られるのであろうか。「恐らく、私の言葉(イタリア語)を学ばうという努力は、私が私自身や私の仕事について、その人々に語り得た何ものにもまさつて、私が彼等に関心をもっていることの真心を認めさせた。言葉を学ぶまでに至つた調査者が、どうして彼の同胞を批判しようなどと企てるものか……。」とここで、

参与観察にかんするエッセイ

彼の調査は専らコーナーヴィルの若い世代、すなわち英語を話す人々に焦点がおかれていた。つまり彼のこの調査の目的のためには、イタリア語は必要なものでもなかつたのである。しかしながら彼のこの努力は、このコーナーヴィルにおいて——その若い世代の間にすら——彼の社会的位置をうちたてるのに大いに役立ったのであつた。⁽¹⁾

3

もともと調査は未知なるものへの探求として始まつた。未知なるもの、それは社会における変化、新事態の発生である。未知なるものは探求されなければならない。社会調査は、産業革命によつてつくり出され、ますます増大していった賃金労働者という新しい人口の種類を唯一無二の対象として生成發展した。調査が向けられた社会は、社会を支配し代表する知識・中産階級の属する社会とは全く別の社会であつた。社会学についても同じことができるかもしれない。ル・ブレーの「労働者」、デュルケームの「自殺」、タマス、ズナニエッキの「移民」、サザランドの「犯罪」そして先の「浮浪者」や「スラム」——それらは中産階級、社会のメイン・ストリームから別の、逸脱的事象を多く課題としていた。

社会学も調査も未知なるものへの探求に向う。それは中産階級知識人としての社会学者や調査者に日常接触のない社会の別の部分であつた。アプローチは容易でなく調査困難な場合も多い。グー

ドリハットは名著『社会調査の方法』(一九五二年)において、参与観察を逸脱的社会や下層社会に適切な調査法とした。⁽⁸⁾ アンダーソンやホワイトのあげた参与観察の実績は、この方法が、アプローチ困難で、まともな調査が不可能な特殊な社会の内面を明らかにしたり、フォーマルな調査関係によつては、ありのままを捉え得ない課題について、適切な方法として、ときにはそれ以外に他にない唯一の方法として用いられていくことになる。

たとえばフェスティンガーら三名の社会学者は世界破滅の予言を信条とする特殊な宗教集団を研究するために、自からを行商人と名乗り、信者として入門し観察を行なった。これに類する参与観察がいろいろ行なわれ、光榮ある軍隊において行なわれたこともあれば、ホモ・男性同性愛者のグループがターゲットとなった場合もある。

軍隊における参与観察は次のようなものであった。それは、空軍に初めは意欲をもつて入隊してきた兵士たちが次第に志気低下におちいる傾向があるところから、その原因は何であり、新兵訓練法において是正すべき点を明らかにするために軍当局との共同で企画されたものであった。一人の調査マンが正規の入隊者として潜入し観察を行なった。彼が普通の入隊者として他の兵士が何ら疑念を起さないうちに、二六歳の大学出の彼は一九歳の不良がかつた高卒の青年に変装され、出身も育ちも変えて、それに合せて第二のパーソナリティをつくりだし、この変身のために九ヶ月を要したという念の入れようであった。⁽⁹⁾

また、ハムフリーズはホモ・男性同性愛者の性行為についての調査にこの方法を用いた。まず彼は、ホモ性行為が行なわれる幾つかの公衆便所の所在をつきとめ、ホモ仲間のあいだにある一つの役割、*queen beater*(親賞役)として参加することが一番よいと判断する。クイーン・ウォッチとは、クイーンはこの場合同性愛者を意味し、その名の通りホモ性交を見つめ、のぞき見のなましみを得、見られる方はそれによつて興奮する、その場面でのパーティシパントをいう。彼はさらに、彼らのカー・ナンバーをひかえ、マーケティング・リサーチのためといつわつて警察から住所氏名をききだし、その時丁度彼が加つていた別のプロジェクト、保健調査のディレクターに、その五〇人を対象に追加してもらい、保健調査として彼らを調査することとした。しかし直後ではパレる心配があるので一年ほど期間をおき、クイーン・ウォッチの時とは車も変え、ヘアスタイルなど風采も全く変えてアプローチしたという。⁽⁹⁾

この結果がどのように発表されたかは知ることができなかったが、ホモの生態がどんなに明らかになつたとしても、大いに問題を含む調査といわなければならぬであろう。先の空軍の調査も社会学者の大きな論議を起こしたが、この調査は、パージェスによれば、カメロット計画と並ぶ、社会調査の問題について大論議を呼んだという。⁽⁹⁾

以上アメリカでは社会学者によっていろいろ行なわれている参与観察は、わが国においてはどうかであろうか。文化人類学者は、その海外調査において、対象社会に長期滞在する参与観察法を同じように用いているが、社会学者によるこの種の研究についてはほとんどきかない。アメリカの社会学者の日本社会研究として、たとえばコロンビア大学のカーチスが、当時自民党の新人候補としてデビューした大分の佐藤文生の食客となり選挙戦をめぐる一年半を共に生活しながら観察するという、ユニークな参与観察はあるのだが……

ガンスは参与観察は社会学者だけのものではなく、文化人類学者やまたジャーナリストたちも、社会の内情、彼の言葉でいえば「インサイド・ストーリー」を書くために用いるものだといえ、わが国において国内の調査では、ジャーナリストの活躍のみが目につく。新聞記者やそれよりもフリーのライター、なかでもルポ・ライターといわれる人たちである。昭和四五年（一九七〇年）頃からのことである。

しかしこれ以前、ずっと遠く明治の時代にこれが行なわれている。新聞記者、桜田文吾による東京と大阪、東西の名だたる貧民窟の探訪記録『貧天地饑寒窟探検記』の中に、それがでてくる。これが新聞『日本』に連載されたのは明治二十三年、一八九〇年のことである。

参与観察にかんするエッセイ

「拓染みた単衣の上に浅葱の三尺を前にしめ、一条の手拭を肩にし」貧民の姿に身をやつした文吾は、木賃宿に泊りつつ貧民窟を歩きまわるが、それだけでは限界があることに気付く。彼はいう。

「外面よりの観察は最早一巡りたり。去来や是より其内部に立ち入らんと種々に方法を案ぜしが、結局彼等の多くと直接し、彼等の多くと談話を取り、饑寒窟の真味を掬するは商人となりて這入り込むに若くはなしと決心したり、然るに士的生活を為し来りし者の悲きは物を商ふすべ頓と分らず、假令ひ少しく心得たるも此窟の商は又格別なり、寧ろ便を求めて行商学見習生となり商人の後へに随て入り込むの外なしと思案し扱行商の種類を見るに此内にては豆腐屋、青物屋、磨石売、烟管すげ換、下駄の歯入及び鉛売等の数者に過ぎず、然るに見習生付きの豆腐屋、青物屋、磨石売も可笑しきものなり去らば烟管すげ換、下駄の歯入は如何にいへば、是れは即ち一種の専門学にして見習生となる前に多少の修業を取らざる可からず、如何はせん何とか名策はなかる可き歟と土地の事情に通曉せる吉田といふ男に譲れば、此男暫し考へ居しか鉛売の弟子最も妙ならんといふ、……」

……是こそ屈強の方法なれと思へば、直ちに其の周旋を托したるに吉田は乃て予を以て吉田の内に居候ふ所の厄介の甥なりと触れ込みて頃親しき一の鉛屋に相談し呉れたるに、鉛屋は早速承諾を与へたりければ身は愈々此日より鉛売の弟子となる去来さらは是れより行かんと、例の単衣に三尺しめ、漂泊的人種の行装して行かんとすれば、吉田は暫しと予を止め、それでは甚だ胡乳臭

し、探偵と見辨められんも知れずと、直ちに印絆繩しんけんじゆん、股引及びひ脚半ひしんを出し与ふ……

其指圖を待ては、是れより商売に出掛く可し、御身は之を穿きてよとて商賣道具を授けらる合点なりとシヤモ大工的新館売は麦藁帽子の上より手拭もて頬破りして、其八九貫目の館箱かかを荷つき、八寸許りの管竹くわんちくを手にてキリノノと振り鳴らし、館屋の師匠か後へに従ひて、何処どこともなく先導者のまにノノ歩み出せり、嗟呼あはれ呼れ臍の緒切てより始めて此に貿易の道に進入せり、青天翁なとに聞かせなは、是れ吾んそ異日君も亦南に貿易家となるの前兆に非ざるを知らんやなと我旧に水を引く可し、師匠の館屋はサツノノと前路に向ひ進み行く、弟子の新館屋も亦之に後れじと急ぎ行き……」⁽¹³⁾

この手法は、続いて横山源之助の兄貴分の松原岩五郎が東京の貧民窟を探訪したときにも用いられている。明治二五年（一八九二年）『国民新聞』に連載された『最暗黒の東京』には、文吾と同じように一応の観察を終えて貧民社会の何らかの稼業につくことを考え、土方、野師、軽業稼業に入りこむことを目指すがうまくゆかず、遂に残飯屋の下男に雇われることに成功する。初めは失敗ばかりで、しようのない奴と思われたが、のちには仲間から「番頭、番頭」と尊敬されるまでになったという。⁽¹⁴⁾しかしその期間は、文吾と同様、一週間ばかりのことである。横山源之助の『日本の下層社会』にはこの種の記述はない。

新聞記者大熊一夫はアル中を装って精神病院に潜入し、患者として過した十二日間の体験と観察を朝日新聞に連載した。これは昭和四五年（一九七〇年）二月のことであったが、丁度同じ年の秋、鎌田憲は北九州八幡製鉄所に下積み労働者として入りこんだ。駅前の作業員募集のポスターをみてというこで労働下宿T組を訪れ、容れられてその下宿人となり、労働に従事しながら観察を行なった。この参与観察は一週間だけのことで、それは八幡製鉄所について、その創設から現在にいたる、この巨大企業全体の像を明らかにする、他のさまざまな資料収集の一部でしかなかった。⁽¹⁵⁾しかし続く『自動車絶望工場』（一九七三年）はその副題が「ある季節工の日記」となっているように六ヶ月に及ぶ参与観察による記録となっている。彼は弘前の職安を通じてトヨタ自動車工業に季節工として入社し住み込みで働く。なかでもコンベアベルトの前に立って働くことがどんなことか、その体験報告は庄巻である。参与観察がありのままの状況における他人の観察ばかりでなく、体験として自身が物事を知ること極めて有効な研究方法であることをそれはよく示している。

これに並ぶものとしては堀江邦夫の『原発ジブシー』がある。原子力発電は、国民に大きな論議をひき起こしながら、その真実は深いヴェールにつつまれてきた。それは現代における全く新しく、ゆえに未知なるものであった。外からの取材には限界があ

り、真実を明らかにするためには、その中にはいつて働くしかない。彼は原発の町敦賀を訪れる。「働きたいのだが何か仕事はないか」という探りに、宿のおやじは「ここでは原発ぐらいいいかな。よかったら紹介してやる」という願ってもないことになって原発で働くことになる。彼は一九七八年九月から十一月末まで働き、さらに所をかえて福島原発に入りこみ十二月から四月まで働く。「そして体内には被ばくが残った」という、鎌田のコンベアベルトの体験を超える体験となったのである。⁽¹⁹⁾

ほぼ同時期、原発のこうした観察記録には、もう一つ藤江信の『原子炉被曝日記』（一九七九年）があるが、この事情は堀江の場合といささか違った面がある。というのは、彼は大学を卒業し、就職先として原発を選んだのである。調査のためというわけでもないのである。彼は次のようにいう。

「……やめることを決めたとはいえ、この三年間は私にとって大きな体験だった。大学に入學した時から数えれば、原子力に関わり始めてから九年の年月が流れようとしている。同時にその年月は、私が原子力から逃れようとした年月でもある。入社前から抱き続けてきた原子力への疑問は、この三年間で深まる一方だった。なぜB社なんかに入社したんだという質問を何度も受けた。一番汚なそうな会社に入社してやれと思っていたので、大学の求人票でB社をみつけた時には特に迷わなかった。今から思えば、この会社に入社したのは、原発の現状を見るためでも、現状と闘うためでもなかった。「時代の先端技術だ」という思い上がった

意識で進路を選んだ私の誤りを、はっきりとこの目で見届ける行為だったと思う。その思いが私をしてあきませずこの会社について語らせる。⁽²⁰⁾

さらに、また別の事情の場合もある。中村章「工場に生きる人びと——内側から描かれた労働者の実像」（一九八二年）である。大学紛争時代、労学連帯につき動かされ、地域活動に専念していた著者は、卒業後、「ともかく俺自身、工場に入ってみよう。その上で大衆とは何か、自分自身が一体何者で何をやるうとしているのか、一から考え直してみよう」とし、工場らしい工場、棒鋼線材工場に入り肉體労働者となる。一九七一年二月のことである。「一生そこで働きたい」と思い「職工になり切ろう」とした。しかし五年ほどして認識の変化から、やがて辞めることを考え、「印象が鮮明なうちに工場の経験や考えを記録しておこうという気になった。」その半年後に退職し、五年半の工場の体験と観察、彼のいう「工場労働者としての二〇〇〇日」をまとめたものがその著書である。⁽²⁰⁾これを経済学者、東大名誉教授原正治郎は、内側から描かれた工場と労働として高く評価している。

新事実の発見、事実究明は科学者の課題であり、ジャーナリストの課題でもある。新しい発見を目指し情報収集、取材に専心する。潜在ルポも、その取材へのライターの執念を示すものである。執念といえはノンフィクション作家のそれには驚嘆させられるものがある。たとえば『滄海よ眠れ——ミッドウェー海戦の生と死』の澤地久枝などその最たるものでないかと思う。

この点について、ジャーナリストの世界というものを知らないが、次の柳田邦男のいうところに教えられる。「取材とは、禁断の木の実を食べるようなものである。自分の目で確かめる充実感、誰よりも先に事実を知るスリル、意外性に遭遇する驚き——そういった経験は考古学者の大発見物語にも似て、興奮に満ちており、一度その木の実の味を覚えると、やめられなくなる。」⁽²²⁾

記者やルポ・ライターはこの種の観察記録には参与観察というチームは見当たらぬ。本多勝一はフリーのライターの中で、鎌田の『自動車絶望工場』や、そして何よりも堀江の『原発ジブーン』を「正に尊敬すべき」「ルポルタージュ史に残る作品」と高く評価している。そして彼自身かつて、こうした「原発への潜入ルポ」は自分でも考えたことがあり、他の仕事に追われて果たせなかったが、「若い人でないとバレやすい」という危惧もあり、堀江氏がよくぞやってくれたとしている。⁽²³⁾この種の参与観察はジャーナリストとしては、「潜入ルポ」ということなのである。

この問題に関して鎌田は次に心の中をうちあけている。「……外から見れば、わたしはなにか底辺好みの潜入ライター、と思われているフシがないではない。が、それは本人にしてみれば、まったく不本意なことなのだ。」

なにも底辺の実態をさぐるために、底辺労働者に身をやつして潜入ルポを書いているわけではない。……『死に絶えた風景』は、北九州工業地帯における労働者収容所としての労働下宿に多くのスペースをとったが、それは新日鉄八幡製鉄を取材しているうち

に、どうしても中の状況を知らなければ書けないところに追いこまれ、構内に入るためには、労働下宿のルートを通るのが、いちばん簡単なためだったからである。

その、暴力によって維持されている労働力のプール組織としての労働下宿で生活し、そこから現場に出て、本工、下請本工、そのまた下の人夫、という存在に身をおくことによって、わたしはようやく、製鉄所の現実を垣間みることができたのである。

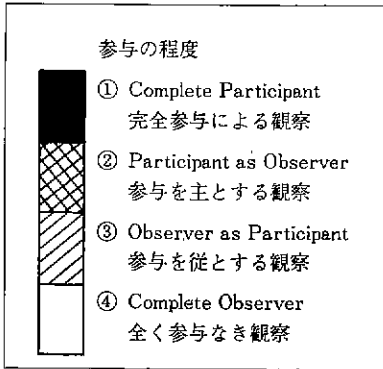
そして、『自動車絶望工場』の場合もまた、合理化、とりわけベルトコンベアに関心があつたわたしは、その実態を捉えるためには、結局そこで働くことしかなく、というところから出発しただけである。話をきいていてもよくわからない。これが、取材者の限界である。とすれば中で働くことはその取材者の限界を破るためのひとつの方策である。が、これは決して普めたことではない。書くために働く、という形で転倒しているからである。もっとも正常な形態は、働いている者が書くことである。その現場で働きつづけているものがその真の表現者たりうるし、表現者にならなければならぬ。⁽²⁴⁾ここに、百年以上前、一八八〇年、その苦悩を知る労働者自身こそ調査の主体者たるべきと訴えたマルクスの言葉を思い出す。

潜入ルポは、結果としては告発のルポとなるであろう。こうしたルポの相次ぐ登場は、わが国高度経済成長の含みさまさまざまな矛盾、そこから噴出する大学紛争など現体制に対する告発、反体制的な思想と行動の大きな流れの存在が社会的背景としてある。そ

れを思うとき、アメリカにおける社会変動の世紀転換期、ジェネ
ブ・リーズ、リンカーン・ステフェンズなど、たまたかうジャーナ
リストを代表するマックレーカーズ(暴露主義者)の時代が想起
されるのである。⁽²⁾ 暴露、告発は社会の改革を志向する。

6

社会調査は現地調査の方法としては、たとえば見知らぬ町を訪
れた旅行者に似た立場で、その見、聞きするところを記録する観
察と、質問紙や面接など質問による調査に大別される。そして観
察は参与観察と非参与(non-participant)観察に分けられ、今は
参与の程度ということで四つの段階に区分されている。



参与観察にかんするエッセイ

①は相手対象者に参与者としてのみ知られ、調査者たることが
全くかくされている場合である。②は調査者として出現し、調査
者として知られているうえで、対象社会の生活や人びととかかわ
り、共に過ごす中で人びととの友好的関係を樹立し、その社会の
一メンバーとしてその位置を得て観察するものである。これにつ
いてやや詳細に言えば、第一段階あるいは初めてのコンタクトに
おいては、調査者は対象社会の人びとにとってはストレンジャー
であり、調査者というものには馴染みはなく、学者先生とか当局
の一員とか、調査者とは別のカテゴリーで受けとめられる。接触
が深まるにつれ人間関係が形成されていき、調査ということも次
第に理解され、彼を調査者、自分を対象者とする関係が定まっ
ていき、調査者はその社会的・暫定的なメンバー(provisional
member)の地位をあたえられる。そこでつつがなきをえて
遂に彼は確固としたメンバー(categorical member)の地位を確
保し、観察を続行するのである。

③は訪問面接調査に似て、その時だけの、一時的なかかわり
として説明されているが、参与の程度として、②が全面的な参与を
目指すのに対して、調査のために必要な限りでの限定された参
与、局部的参与といえよう。④は対象社会の人びとと全くかわ
りをもたない観察である。⁽³⁾ (その最たるものとしては、ワンサイ
ド・ミラーを透しての観察があげられる。)

要するに、どこまでインサイダーか、どこまでアウトサイダー
かということであるが、完全参与は調査者たることを秘めている

ということ、すなわち参与者というものに身をかくした観察であることによって、重大な問題が生じる。ここに、参与観察はオープンかシークレットか、ということでも区分がなされることになる。そして参与観察は、方法技術としてよりも、その最たるものがシークレットな調査であることによって、調査のあり方をめぐって大論議を起すことになる。かつてアンダーソンがホボの世界に身を投じた参与観察は、アームチェアの社会学者が軽蔑されるフィールド・ワークが重視される社会学の世界において、賞賛すべき快挙と受けとめられていた。一九六〇年に近づくと頃から、そして六〇年代、とくにその後半以後、参与観察、とくに潜在的タイプの参与観察 (the undercover type of participant observation) は、対象者尊重の立場から本来調査はオープンであるべきとする社会学者から厳しい批判にさらされることになる。⁽²⁷⁾これについては最後にふれることにする。

7

鎌田慧は東北からの上京少年として町工場で働く体験があった。⁽²⁸⁾「何も好きこのんで底辺の生活を書いているのではなく、わたし自身終始一貫底辺生活者でしかなかったし、そこでの生活を書いていただけのことである。」⁽²⁹⁾といっている。過去は現在を方向づけるが、現在はまた新しい自分をつくりうる。

人は各自その所属する社会について、体験者として確かな知識をもち、その社会について語ることができる。参与観察は本所属

さざる社会に調査のために所属するわけであるが、たとえば各自の人生における出来事として、新しい社会や集団への所属はふつうに起こることである。かくして彼は新しい社会の体験者となり、その社会について知り、その社会について語ることができる。もし彼がそこにおいて、それについて観察と記録に留意するならば、それもまた一つの参与観察ともいえよう。中村の『工場で働く人びと』などこれに近い。アメリカでは犯罪学者がその地位を辞し、正規の警察官となり、警察官の意識、態度、行動が、そのおかれた状況——犯罪多発地帯か平穏な住宅街か——によって違うことを体験的に明らかにした研究がある。また、大宅壮一ノンフィクション賞を受けた鈴木俊子の『誰も書かなかったソ連』が別の例としてある。モスクワに赴任した新聞記者の妻としてそこで過ごした三年間の観察を記録したものである。さらに別のものとして所属集団をしりぞいて「今だからいう」という形で、その集団の内情について語るものもある。しかしこれは回顧録であり、当人の主張や合理化を大いに含む主観的な色合いの強いものとなり、客観的事実をもって語る調査とはいえない。

このようにいろいろなケースを考えると、調査——それは非日常的なものである——と日常的なもの、科学と常識が参与観察の中に交錯しややくしくなる。ここに参与観察は一般人の日常的観察に近く、主観的で印象主義的なものになり客観的調査とはいえないという非難がしばしば生ずる理由がある。しかし参与観察はあくまでも調査であり、フィールド・ワークの方法としてある。

社会の体験的記録は誰でも書けるかも知れないが、すべて調査としての価値があるわけではない。その主体は他の誰でもなく調査者、科学者でなければならぬ。調査とは科学することであり、それは客観的事実の獲得にある。すなわち主観性が克服されること、観察条件がいかにコントロールされているかが重要課題である。

ランダム・サンプリングによって対象を設定し、標準化された調査票によって情報を収集し、統計的分析によってひたすら客観的事実の把握に向う一般の調査に対して、これにかわる何が参与観察にあるであろうか。参与観察は調査者そのものが調査用具といえる。用具がどれだけすぐれているかによって価値ある調査であるかどうかが決まる。参与観察について、改めて社会調査のテキスト・ブックを中心にいろいろ論文を読んでみたが（巻末参考文献参照）、四〇年代のフローレンス・クラックホーンやホワイトから多く出るところはないように思う。ただ参与観察を真に科学的ならしめる丹念な研究として、この課題に非常に多くのページ数をさいたデンジンが詳細に紹介し検討を加えたベッカー等の『白衣の若者たち』(Boys in White, 1961)がある。これはカンサス医大でふつうの若者である新入生が医師に向って自己形成を行なっていく社会化過程をあとづけた参与観察を中心とする研究である。彼らはチームとして学校の中に長期居住し、インフォーマルな付き合いを含めて、さまざまな場面に参与し観察を行なった。対象の設定、課題についての理論的検討、調査問題の定式化、理論の現実化としての仮説、概念システム、ケースあるいは現象

の概念化、ネガティブ・ケースの出現による仮説の再構成等、単に目につく事実の記録を超えた、理論と事実との関連における観察となつてゐる。

デンジンは、参与観察の優利な点として、他の調査では調査の中心的人物がフィールド・ワークをしなない（調査員は学生等である）のに対して、自身がフィールドワーカーであることをあげている⁽⁹⁾。その場合、彼はすぐれた研究者であり、そしてすぐれたフィールドワーカーでなければならぬ。いかに価値ある調査であるかどうかは、調査者のその課題に対する研究の深さ、そして調査者としての資質であろうが、とりわけこの参与観察においては、このことが重要である。

参与観察は研究者としてのみでなく、対象社会の中で参与者あるいは一員として、その社会にに応じていかに適切に役割を果たし得るかが課題となる。

われわれの変えることのできない個人の属性として性や年齢がある。参与はその範囲に限定される。前述したようにフローレンス・クラックホーンは主婦の地位役割における参与観察であった。アラブなど男性から閉された女性の世界は女性によってしかアプローチできない。レズの世界の丹念な調査研究は、ドナ・ターナーの行なつたように、女性であればこそできたに違いない。⁽¹⁰⁾女性であっても年齢もまた関係する要素である。ロイス・イースタデイら四人の若い女性調査グループは、女性であること、若い女性であることがフィールドにおいてどのような反応をよび、問題

を生じるかを検討している。さまざまなフィールド経験の中で、フィールドワークのエキスパートの女性であるが、年配の婦人であったがゆえに受け入れられなかったグループにも、若い女性研究者であったがゆえに受け入れられたことが語られている。この場合、若いこと、エキスパートでないということが、かえってよかったわけである。⁽⁸⁾

性・年齢および社会的地位は、社会のある領域へのアプローチの難易に関係する一つの要素である。ショバークのいうように、かけ出しの研究者ではアプローチが極めて困難なハイレベルの社会（たとえば財界人の世界）にも、彼が有名な一流の学者であることによって可能性がひらかれる。

アメリカでは、白人を黒人に変えて行なった参与観察がある。大学時代、黒人に対する差別に深く心を痛めた青年は、ある素人によって肌の色をかえ、黒人に身をやつして南部へ行き、黒人として生活した体験を記録した。⁽⁷⁾ 性も年齢も、一時的にはゴマかせるかもしれない。しかし参与観察においては、長く深い付き合いとなるのでそういうわけにはゆかない。ショバークもいうように、結局、性と年齢の限定において、対象集団の状況に応じて、いかにそれを有効に活用できるかということであろう。⁽⁴⁾ 参与観察の基底には、オルセンのいう「相互に人として付き合う過程」(mutual humanizing process) ⁽⁶⁾ があり、ガンスもいうように、調査者のパーソナリティ、人柄といったもの⁽⁹⁾が、彼がどのようになど、どれだけ受け容れられるか重要な要素となるであろう。

ガンスは参与観察を対象社会のメンバーであることと参与者であることと、ストレンジャー⁽⁸⁾ 観察者であることの果てしなき弁証法と表現した。デンジンは、そこで調査者は、今は隠されている本来の自己 (his hidden self) とその社会で役割を演じる見せかけの自己 (his pretended self) と、そして観察者としての自己 (his self as observer) と三つの役割において状況に対応しなければならぬという。⁽⁹⁾ それは労多き調査者の自己に対するたたかいとなる。

コムブリート・パーティンバント、完全参与者ということは、文字通りにとれば、参与者としてのみあり、ゆえに調査者の面は全く消滅するはずである。しかしそうであっては、参与観察は調査ということにならない。ここでは、調査こそが第一の目的である。相手対象者が彼をほとんど参与者としてののみ意識し、調査者であることを忘れてしまおうと、調査者自身は自分は調査者であり、調査をしていることを知っている。それからすれば参与は手段にすぎない。付き合いも友人的關係も調査のための手段である。しかし、手段である友人關係は真の友人關係といえないであろう。この矛盾は参与観察に避けることのできない問題である。

『ルポ・精神病院』において大熊はいう。
「アル中でもないのに、アル中と偽って病院にはいった。人を騙すのは、気分のいいものではない。とくに、夕方、くすりを口

に入れてくれた看護。夫、さんのように、やさしい声をかけられると、「申し訳ない」と思う。

だが、精神病院の密室性を暴くには、これしか方法はあるまい。「アルバイト職員として雇われた方が、『罪』が軽かったのではないか」「いや、患者として入院し、患者の視点でない」と、問題を見誤る。これでいいのだ」等々、きょう一日の出来事をめぐって、際限なく自問自答を繰り返す。ますます目がさえてくる。

潜行的タイプの参与観察についても、アメリカの社会学者の間で賛否両論がある。事実究明のプロフェッショナルな行為として認められるとするもの、反社会的集団など特別な場合は許容されるとか、社会的に有用な目的や対象者の利益のために使われるならよしとする立場から、調査はオープンであるべきこと、対象者をだますことは決して許されないとする立場まで、いろいろ見解がある。

参与観察は調査の一つ用具あるいは戦略にかんするものである。しかし何事にせよ、相手が人であることを超えて、対象を自由に操作することは許されない。参与観察はテクニクとしての論議を超えて何よりも調査者のあり方の問題として考えるべき問題である。すなわち調査というものは、調査の対象者をどう考えるかという問題である。調査の対象者は人間であり、犯罪者であり、開発途上国のストリート・チルドレンであれ、人間として個人として尊重されなければならないということである。人間尊重、個人尊重を無視した一切の社会調査は、いかに合理化をせよ

参与観察にかんするエッセイ

うと、悪魔となり、またなり得るものとしなければならない。

この小論を書きおえて、いま、『ストリート・コーナー・ソサエティ』は私は目の前にある。それは、かつて若き時代、社会学も社会調査も面白いものであるかも知れないと思つた書物の中の一つである。そして参与観察についていえば、このコーナーヴィルにおけるホワイトのあり方が、よき参与観察のあり方であり、また社会調査における調査者のあり方ではないかと、その時思ひ、今も思っている。パーティシパント・オブザーベーションが私にとつて暖かい言葉となつてしまつたのはホワイトのせいなのであろう。この本との出会いから三十五年が経過しようとしている。チョコレート色の台紙に白い線で、古きよき時代のビルを背景に、オールドファッションの街燈の下に、幾人かの若者のたむろする情景を描いたブックカバーは、色あせているが今も健在である。こんな街角は、今のアメリカの何処かに残っているのだろうか。

注

- (1) W. F. Whyte, *Street Corner Society*, second ed., 1955.
- (2) P. V. Young, *Scientific Social Surveys and Research*, 1956.
- (3) W. J. Goode & P. K. Hart, *Methods in Social Research*, 1952.
- (4) G. Sjoberg & R. Nett, *A Methodology for Social Re-*

- search, 1968.
- (5) N. K. Denzin, *The Research Act*, 1970.
- (6) N. K. Denzin (ed.), *Sociological Methods*, 1970.
- R. L. Gold, Roles in Sociological Field Observations.
- V. I. Olesen et al., Role-Making in Participant Observation.
- H. S. Becker, Problems of Inference and Proof in Participant Observation.
- (7) E. Diener et al., *Ethics in Social and Behavioral Research*, 1978.
- (8) R. G. Burgess (ed.), *Field Research: A Sourcebook and Field Manual*, 1982.
- R. G. Burgess, Some Role Problems in Field Research.
- R. Frankenberger, Participant Observers.
- H. J. Gans, The Participant Observer as Human-Being.
- Lois Easterday et als, Making of Female Researcher.
- I. C. Jarvie, Problem of Ethical Integrity in Participant Observation.
- (9) R. G. Burgess, *In the Field: An Introduction to Field Research*, 1984.
- (10) D. M. Tanner, *The Lesbian Couple*, 1978.
- (11) F. Kluckhohn, The Participant-Observer Technique in Small Communities, in *American Journal of Sociology*, 1940, Sept.
- (12) M. A. Sullivan et als, Participant Observation as Em-

played in Study of A Military Training program, in *American Sociological Review*, 1958, Dec.

- (13) 西田長寿編『明治前期の都市下層社会』光生館 一九七〇年。
- (14) 松原岩五郎『最暗黒の東京』岩波文庫 一九八八年。
- (15) 鎌田 慧『死に絶えた風景』ダイヤモンド社 一九七一年。
- (16) 鎌田 慧『自動車絶望工場』現代史出版会 一九七三年。
- (17) 鎌田 慧『わが幻影の工場地帯』風媒社 一九七六年。
- (18) 鎌田 慧『工場と記録』晶文社 一九七七年。
- (19) 堀江邦夫『原発ジプシー』現代書館 一九七九年。
- (20) 森江 信『原子炉被曝日記』技術と人間(社) 一九七九年。
- (21) 本多勝一『ルポルタージュの方法』すずき書店 一九八〇年。
- (22) 柳田邦男『事実の時代に』新潮社 一九八〇年。
- (23) 中村 章『工場に生きる人びと』学陽書房 一九八二年。
- (24) 大熊一夫『ルポ・精神病棟』朝日新聞社 一九八一年。
- (25) G. Curtis, *Election Campaigning Japanese Style*, 1969. 山岡清二訳『代議士の誕生』サイマル出版会 一九七一年。
- (26) 鈴木俊子『誰も書かなかったソ連』サンケイ新聞社 一九七一年。
- (27) その他拙稿「観察者と被観察者の間」「何のための調査か」「ある新聞記者のたまたかい」「社会調査とフライバシー」(いずれも同志社大学人文学・評論・社会科学)。